

柳田国男と「海上の道」

国分, 直一 / コクブ, ナオイチ

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究

(巻 / Volume)

3

(開始ページ / Start Page)

229

(終了ページ / End Page)

243

(発行年 / Year)

1976-07-28

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00015514>

柳田国男と「海上の道」

国分直一

一

法政大学の沖縄研究所主催の柳田国男生誕百年記念の講演会におまねきを受けましたので、柳田先生の『海上の道』を取り上げさせていただきます。先生は故人になられ、歴史的存在として評価される時ではありますが、私の眼にはありし日のお顔がまだ眼のあたりに浮かんでまいりますので、柳田国男とよばず、柳田国男先生と、この講演では、敬称をつけることに致します。その方が気が楽で話がし易いのです。本日は、柳田先生の海上交通をめぐる研究を問題にいたすわけですが、特に先生の寶貝とズズダマと稲作をめぐる有名な想定を中心にして、先生の立場を先づ把握いたしたいと思えます。その上で、先生のもたれた見通しのいかなる面が、隣接科学、特に考古学的調査の成果に立つ時、修正を必要とするか、あるいは

海上交通の証跡と考えられるものはないものであろうかどうか。そういう点にもふれてみたいと思います。

二

「海上の道」は柳田先生が若い時代から久しく育まれていた海上交通をめぐる問題について、先生の研究と思索を傾けられたものとして知られています。私がこの論文をはじめ読んで読んだのは、雑誌『心』の五巻一〇号、一一号、一二号（昭和二七年一〇月、十一月、十二月刊）においてでありました。然しその論文は『心』の掲載にわづかに、さきがけて、昭和二七年五月、第六回の九学会連合大会で、「海上生活の話」として、公開講演されたものです。

なお、その講演に先立って、昭和二五年一〇月には、沖縄文化協会の雑誌『沖縄文化』二巻七号に「寶貝のこと」を發表されています。また自然史学会の雑誌『自然と文化』三号に「人とズズダマ」を發表されています。後者は第六回九学会講演の直前に、『自然と文化』誌上に載ったものでありましょう。従って第六回九学会講演の「海上生活の話」は「寶貝のこと」と「人とズズダマ」をふまえて展開されたものと考えてよいものでありましょう。先生はその後、昭和二九年五月第八回九学会連合大会において「海上の移住」と題して関連する問題について、報告されました。『人類科学』第七集に要旨がのせられています。明治三十年の夏、先生がまだ大学の二年の休みに、三河の伊良湖崎の突端に遊ばれた時、所謂あゆの風に吹きよせられた椰子の実を見て以来、半世紀を越えて、胸にはぐくみ、あたためられてきた海上交通をめ

ぐる問題についての想定が漸く熟してきたのが、昭和二五年から昭和二七年頃にかけてであったことが考えられましょう。九学会連合の気運が進んで、既に六回の大会をもった時に、先生は立って、公開講演を行われたのであります。民俗学的研究と思索を深めて、その上に立って隣接科学の学者者によびかけられたのですから、先生は極めて慎重な発言と、謙遜なお態度を示しておられるが、心中かなりの自信をもっておられたものであらうと考えます。この講演に対し、当時どのような反応があったか、あるいは批判があったかはわかっていません。いや聞いていません。柳田先生があまりにも亭々たる巨木でありましたから、批判的に先生の説を乗りこえようとする発言は当時においてはなかったものではないでしょうか。

先生はその後、昭和三六年七月に『海上の道』と題する単行の論文集を筑摩書房から出されました。その巻頭にかかげられた「海上の道」こそは、第六回九学会大会における公開講演「海上生活の話」そのものであります。九学会講演に先立つ「寶貝のこと」「人とズズダマ」もその論文集におさめられました。その他、南島と本土をふくむ信仰関係の問題を扱われた他の五篇の論考もおさめられました。それらは何れも、日本民俗学研究の展開の上で、光を導くことになった雄篇です。発表された順にあげておきましょう。

「海神宮考」は『民族学研究』一五巻二号（昭和二五年一月）「沖縄特輯号」に発表されたもの、「みろくの船」は『心』復刊一号（昭和二六年一〇月）に発表されたもの、「稲の産屋」は、にひなめ研究会の編集による「新嘗の研究」一輯（昭和二八年一月）に発表されたもの。「根の国の話」は『心』八巻九号（昭和三〇年九月）に発表されたもの、「鼠の浄土」は成城大学紀要『伝承文化』一号（昭和三五年一〇月）に、それ

ぞれ発表されたものでありました。こうして編みあげられたものを通して見ますと、「海上の道」「海上生活の話」は本書全体の序説となつてゐることがわかります。「日本人は最初どの方面から、どこへ来たか。つぎつぎに、どの方面へ移りひろがつたか」という中心の問題をめぐつて、含蓄に富む表現で説き進められています。然しこの序説をあまりなく読むためには、「寶貝のこと」「人とズズダマ」を併せ読まなくてはなりません。先生は、始祖日本人は、はじめは漂着するのであるが「寶貝の魅力」にひかれて、南島の一角に本格的に移住するに至つたと想定されました。先生はその地点として宮古島を考えられていたようです。

秦の始皇の世に、銅を通貨に鑄るやうになつたまでは、中国の至宝は寶貝であり、其中でも二種のシプレア・モネタと称する黄に光る子安貝は、一切利欲願望の中心であつた。今でもこの貝の産地は限られて居るが、極東の方面に至つては、我々の同胞種族が居住する群島周辺の珊瑚礁上より外には、近いあたりには、之を産する処は知られて居ない。

と述べられ、琉球三十六島の中では宮古島に注目されました。

千に一つと言つてよい幸福に恵まれて、無人の孤島に流れ着き、そこに食物を求めようとして測らずも稀なる世の宝が、さざれ小石の如く散乱して居るのを見付けたといふなどは、一つの大きな民族の起原として、あまりにもたより無い夢か伝奇のやうであらうが、正直なところけふといふ日まで、是よりももつと有り得べき解説を、まだ私などは聴いてゐないのである。

と述べられています。先生は御自分の想定に次第に自信を深められていたものでありましょう。次のよう

に九学会を構成する隣接科学の研究者によびかけられました。

いはゆる東夷の活躍が次第に影響を中原の文化に及ぼし、宝貝の重視熱望がほぼ頂点に達せんとした時代が、ちやうど極東列島の何れかの一つに、始祖日本人の小さな群が足を印した頃らしいときまると、それから後の約二千年、即ち安全なる年代記に繋がるまでの大きな空間は、先づそつくりとこの九学会の領分に入つて来て、外ではただ研究の成果を期待することになるであらう。皆さんの責任は無上に重くはなるが、この想像はかなり爽快なものだと思ふ。

と述べられました。先生御自身、この想定を立てえられたことで、爽快なお気もちであられたものでありましょう。始祖日本人の登場と関連してとりあげられたのは、稲作の灌漑様式の発展と、これに伴う信仰の問題であります。日本の稲作灌漑様式の発展は、(一)天水によるもの、(二)清水掛り、(三)池掛り、(四)堰掛りと四つに分けられるが、既に第二、第三の灌漑方式の可能なることを知って居りながら、わざわざ(一)の道しかない小島へ渡って農を営もうと企てることは有りえない。かくて原始日本人の南から北への移動が推定されることになるのです。先生は更に造船の技術、海上交通の技術などにふれられています。西南の島島にいくつかの古見または、久米とよばれる地域があるのは、稲作の古く行われた痕跡らしいと考えられています。「舟で浦づたひにさういふ地形を求めてあるく習はしが、久しく続いて居たのではないかどうか」とも述べ、最後に九学会講演は次のように結ばれています。

四面を海で囲まれた国の人としては、今はまたあまりにも海の路を無視し過ぎる。やゝ奇矯に失した私の民族起原論が、殆ど完膚なく撃破せられるやうな日が来るならば、それこそは我々の学問の新しい展

開である。寧ろさういう日の一日も早く、列来せんことを私は待ち焦れて居る。

「寶貝のこと」では、おもろ双紙のツシャの解釈から出発し、ツシャが最初寶貝でなかったろうかと想定されています。また日本の古語の中で、語音の是に近いものを求めると、ツシタマというものがあると、問題を展開されています。そのツシタマを「近世一般にはズズダマと呼ぶ者が多かつた」のです。

大小の相異は著しいけれども、植物のツシタマも形状曲線、殊に色沢がよほどよくあの貝に似てゐる。

この実は成熟につれて、同じ一つの穂でも段々と色あひをかへる。もしも其取合せが、この海の貝の頸飾りの楽しみの一つだつたならば、どうせ代用品だから物足らぬにはきまつて居るが、先づ是だけでも一応は気がすんだことであらう。ツシヤといふ名前の、貝より草の実への移行は或は斯ういふ風にも説明することが出来はすまいか。

貝より草の実への移行を追跡していかれた想定過程はまことに先生独特のものでありましょう。

沖繩諸島のように頸飾りの習俗が久しく伝わり、是に宗教的関心を続けていた社会において、手近に豊産する類まれな美しい寶貝を利用の外におくようになったかについては、蠶を以て賦課した制度のあったことから推定されています。その上で、次のように述べておられる。

其自用の禁止は全島にわたつて、相応に峻厳なものであつたらうと思はれる。そんな必要は無論夙く無くなり、文書記録の類は島津入りの日に焼かれたのかも知れぬが、人が五代七代も引続いて、寶貝ばかりは頸飾りにすべきものでないときめてしまふと、一つの生活様式はそれで中断して、もはや復興を企てる力も無く、殊に此島々では政治と信仰との機能が密接して居たので、或は又一種のタブーが此上に

働いて居たものと考へられる。

私は、「海上の道」「寶貝のこと」「人とズズダマ」の三論考の中で、今あげた先生の想定部分は、有力な想定として、顧りみられるものであろうと考えますが、寶貝使用があったとしても―先史時代にも、城時代にも多少の例はあります―大和から曲玉が輸入されるようになる、曲玉に圧倒されてしまったもので、なかりうかと考えています。

先生はどのような論考を展開された場合にも典拠とされた文献をお示しにならないのが普通であったといつてよいかと思ひます。然し「人とズズダマ」には附記として、文献があげられています。ズズダマについては『古事類苑』植物七を読み、その中に抄録せられた本の家蔵するものだけは念の為に眼を通してと述べられています。「畔田氏の古名録は幾つかの暗示を提供してくれる」とあります。しかし結局は幼年時代からの自分の記憶だと述べられていることは、まことに興味深いと思ひます。

なお意外なことは、「貝塚氏の『中国古代史の発展』が大きな感化力で、それがこの一文の発足点にもなつて居る」と述べられていることです。古代中国における錢貨の登場の時期や中国古代史における東夷の問題などについて考えられる所があったものではないでしょうか。寶貝についてはジャクソンの「文化伝播の証拠としての貝類」を二度ほど読んで居るとあります。貝類学者黒田徳米氏については絶対の信頼をよせておられたことがわかります。「私は先生の若干の抜刷類を乞ひ受けて、自分の考へともし両立せぬ意見があつたら、自分の説を引込めようと思つた。幸ひにして是ぞといふ矛盾は無かつたやうだが、なほ念の為此文が出たら検閲を乞ふ積りである」と述べられています。浜田教授の『東洋学報』第二巻の

二つの論文は二年ほど前に読み、此篇を書くに先立っては見る事が出来なかったと述べておられるので、参照されなかったという事でありましょう。確かにその中に「南満洲に於ける考古学研究」があったと思います。江上波夫氏の「極東における子安貝流通」は二度読み、今も座右に置いて居るとあります。杉本直二郎氏の「中世に於ける雲南の貝貨」もあげておられます。『南方熊楠全集』の中の二三の印度宝貝流通の記事を抄出したことも附記されています。このように拠った文献をわざわざあげられることはめったにないので、わざわざふれたわけですが、先生が大きな問題に立ち向うに当って、充実した自信に満ちておられたことと、なんらかのかかわりはなかったものでしょうか。

論文集『海上の道』にあげられた他の五篇の論考は、何れも稲作をめぐる信仰の世界に深くはいっているものです。私には「日本人は最初どの方面から、どこへ来たか、つぎつぎに、どの方面へ移りひろがったか」を主題にされた「海上の道」(海上生活の話)よりは、稲作をめぐる信仰を扱った五篇の論考に深くうたれます。デリケートな思想のひだをまさぐるような仕方では進められる先生の文章を読んでいると絶対にかかわないと思われてくるのです。論考集『海上の道』では、それらの諸篇が微妙にひびき合って、混然たるオーケストラを構成しているような気もちにさそわれていくのです。その微妙なひびきあいを一々説明していかねばならないとするなら、私ではだめだと白状した方がよいと思います。

先生は九学会大会において、始祖日本人の起源についての想定を示されて、隣接科学の学者たちも立ち向うようにと、よびかけられたのでありますから、その点をめぐって発言しておくことは許されるであります。先生のいわれた「始祖日本人」の「始祖」という言葉に強いてかかわるとするなら、今日で

は旧石器文化の存在がわかってきているので、そのことにふれなくてはならないでありましょうが、先生の「始祖日本人」とは「稲作を導入した人々」という意味にとってもいいのではないかと考えます。

それでそのような立場で若干の発言をしておきます。その発言に先立って、いっておきたいことは、柳田先生が「海上の移住」を第八回九学会連合大会で発表された昭和二九年春には、先生が主催されて南島文化の総合調査の企画が進められました。先生は直接調査に参加されませんでした。柳田先生の意図を受けて、金関丈夫教授が八重山諸島の調査に南下されました。金関教授は永井昌文氏（現九大教授、解剖学担当）、柳田先生の成城の研究所の所員酒井卯作氏をひきいられ、国分をも加えて下さって、三月と四月にわたって、形質人類学・考古学・民俗学の諸分野にわたる調査研究にあたられました。私は考古学的調査の助手をいたしました。全力を傾倒しましたのは波照間島下田原貝塚の発掘調査でした。宮古島には僅かに立ち寄っただけでしたが、石垣島、竹富島のサーヴェーもいたしました。喜舎場永珣先生が御健在の時、二回にわたる波照間島調査の調査ノートを、波照間島に渡るに当って貸し与えられました。沖縄からは沖縄における考古学の先覚者多和田真淳氏が案内役を買って参加して下さいました。明治三七年に鳥居龍蔵先生が石垣島の川平貝塚を調査されて以来、人類学関係の調査は、喜舎場先生の民俗学的調査を除いては、はじめてのことであったのですから、驚くべき長い空白があったのです。この空白を柳田国男先生は埋めようとしたのです。尚、金関調査団の他に馬淵東一教授が別に柳田先生の意図を受けて調査のために南下されています。このことを附加したのは、昭和二七年から、二九年頃にかけて、柳田先生が隣接科学に対して期待されていたことがわかるためです。金関丈夫教授に八重山調査を委嘱されたのは、

金関教授が形質人類学のみならず、考古学、民族学、民俗学、古代史学の多面にわたる稀に見る博大な研究世界をもっておられたからでありましょう。

三

さてこのあたりで、はたして南島はわが稲作の源流地であったかどうかにはふれておきましよう。

エール大学の張光直教授が龍山形成期文化 (Lungshanoid culture) とよぶ文化は仰韶文化に見られる彩陶の流れを含みながら、黒陶を主流とする様相を示す文化ですが、この文化は、江南を経て、台湾海峡を越えて台湾西海岸にはいつています。漁撈を伴いますが、農耕文化でありまして、この流れを伝える台湾西海岸中部の営埔遺跡には稲が存在していたことが靱圧痕をとどめる土器によって判明しています。わが琉球諸島には、この系統の土器も、この土器に伴う石庖丁、石鎌、石犁等をふくむ農耕石器は登場していません。台湾においても江南においても、龍山形成期文化は後に赤褐色無文の土器と印文を有する土器を主体とする時期に展開していくのですが、そのような様相もわが琉球諸島に登場していません。

私は龍山形成期文化の時期はもとよりのこと、印文土器文化の時期にはいっても、江南・台湾文化圏から稲作は遂に登場していなかったのではないかと想定しています。宝貝をめぐる先生の想定は興味深いのですが、宝貝の豊産水域をもつ宮古島は、稲作導入地としては特に絶望的であろうと考えています。水の便が悪い所ですから、先史時代人にとって本格的な定着は困難でなかったであろうかと思われています。石器や

貝製利器を十分に使用したと見られる遺跡は発見されていません。拠点的に先史人が利用したと見られる痕跡は発見されていますが。江南から先秦農耕社会のものが、漂着のあと、宝貝の魅力にひかれて、妻や娘をつれて、再登場定着したとする先生の想定は、三河伊良湖崎の突端に椰子の実の漂いついているのを見られた若き日以来、柳田先生の胸中にあたためられ育まれてきた詩的イマジネーションの結晶として評価されるべき性質のものと考えられましょう。それなら琉球諸島はその先史時代において江南・台湾文化圏のいかなる種類の穀作も受けいれていなかったかといえますと、ささやかな想定まで拒否することは出来ません。八重山諸島先史時代に登場した下田原式土器をもたらした人々は原始農耕さえもたなかった人々であるかどうかという問題があります。私は下田原式土器以前の八重山先土器時代人もなんらかの栽培植物をもっていたのでなからうかと考えています。その栽培植物はヤム系のイモでなかったかと考えています。中央に稜のあるインドネシア先史石器の名残をとどめる鉄製耨器がバシ海峡のバタン島ではヤム耕作に現在でも使用されています。有稜石器は八重山先土器時代に既に登場、下田原式土器時代にも及んでいます。私はこの石器はイモ作と関係をもっていたのでなからうかと考えています。イモの中で、タロ系のイモがくみ合せられていた可能性は考えておく必要があります。

先土器社会に下田原式土器が登場した意義はいかに考えられましょうか。先づあの形式の土器はいかにして登場したものでありましょうか。八重山で独自に発明されたものでなかったなら、どこかからはいったと考えるより他ありません。私は今の所、台湾東海岸の巨石文化地方に源流していると考えています。この文化には龍山形成期文化の要素もはいついていないわけではありませんが、印文土器の被覆を受ける前

の赤褐色無文土器を主体とする、巨石を建築に用い豚飼養を行った文化だと見ています。一部には稲作が登場していたと考えられますが、主体をなしたものは粟作であったと考えています。巨石文化の土器は焼成において、下田原式のそれに酷似しています。器形においても相似した器形が見出されます。巨石文化においても、土器技術とともに粟作が八重山に導入されたのではなからうかと考えています。巨石文化は下田原式の流れをくむ八重山式土器においても、耳を横につけたような把手をもちます。巨石文化においては、その把手が独特の形―指をさし入れて把持できるような構造のもの―に発達します。最近沖縄県文化課の安里嗣順氏は八重山先史土器を土師とよび、国分説に否定的解説をされましたが、土師器は弥生時代終末期に弥生式土器の技術の中からあらわれたものです。八重山先史土器を土師器とするには、想定を進める上の手続上に甚しい欠落があります。焼成から見て土師的であるとはいえましょうが、その点では、台湾巨石文化の土器も台湾西海岸の赤褐色無文土器もインドネシアの先史土器もポリネシアの土器も、その早いステージ以来土師器に似ています。稲作のわが日本への最初の渡来が南島のどこかの島を経由したと想定することは困難ですが、江南『台湾文化圏との接渉の存在は否定できません。江南―台湾文化圏に源流するものであろうと見られる要素は、論文集『海上の道』が単行本として登場した昭和三六年頃迄にかなり、発見されるようになりました。その一つが饗飩文系の文様、龍文系文様の彫刻をもった貝製品、龍佩系の貝製ペンダント、中国古代の葬制に登場する蛤蟬を想わせる蟬型の彫刻をもつ貝製品、古代楚国の棺底に敷いた苔床のデザインに似たデザインをとどめる貝製品が、種子島広田の埋葬（弥生前期末―後期）において発見されました。龍文系の骨製彫刻はより早く沖縄先史時代の前期土器のステージにおいて登場

しています。先生の論文集『海上の道』が出版された年の秋も晩い頃でありましたが、馬淵東一教授から、江南との関連を示す資料が増えてきているなら、柳田国男先生に早くお目にかけておくようにと、御連絡がありましたので、私はスライドを用意して成城の先生のお宅に参上しました。先生は端然と椅子に腰かけられ、電気コタツの上に両足をそろえてのせられて、実に熱心に私のスライドを通しての説明をきいて下さいました。先生は稲作をめぐっては、何に一つ御質問になりませんが、この近年の研究の進展については、国際学会で外国の研究者にも見せるとよいとおすすめ下さいました。ハワイで開かれることになっていた第十一回太平洋学術会議において「沖縄シムポジウム」が行われる企画が進んでいたことを先生は知っておられたのです。

当時先生は往年の精神の敵しさを示すようなお顔ではなく、まことにやさしい温容でありました。帰りがわ玄関で汗くさいオーヴァを着ようとしていると、先生の奥様が手伝って下さったものですから、すっかり恐縮してしまい、あたふたと成城の通りの落葉を踏んでひき上げました。その道々、先生どうかいつまでもお元気でられるようにと思ひながら。

一つつけ加えておきたいことは、南島における稲の登場についてです。私は石垣島の山原貝塚でビルマ稲のような長い籾痕と見られるものと似た八重山式土器を採集しました。この遺跡は包含層が浅く、中国系青磁と八重山式土器が混存していました。中世末―近世初頭における華南、南蛮との交易時代に南方のインディカ系の稲の登場したことが考えられましょう。琉球諸島における南方系と見られる土着稲の存在についても、華南―南蛮交易時代との関連において、私は考えています。波照間島には江南―台湾系

の印文土器が登場していますが、稲作との関連は不明ですが、おそらく稲とは無関係だったと考えてよいでしょう。

弥生中期には種子島に九州系のジャポニカ型の稲がはいつていました。大和朝廷の南島経営の開始とともに九州系古代文化の南漸のあることが考えられますが、稲作の南漸はおくれたようです。その時期は須恵質の土器が旺然と南漸広布する時期までまたなくてはならなかったものでなかるうかと考えています。平安朝頃のものとおさえられている須恵質土器にジャポニカ型の靱痕をとどめるものが奄美大島で見られています。遣唐使が南島路をとった頃に九州系稲が南漸したものではないでしょうか。柳田先生の御想定とは離れるが報告しておきます。

最後にもう一つ付け加えておきます。先生は宝貝について、その分布に言及された時、「我々の同胞種族の居住する群島周辺の珊瑚礁上より外には、近いあたりには、之を産する処は知られて居ない」と考えられたことが、先生の始祖日本人の宮古島再来説を導くことになったことは上述しました。先生はその分布について自信をもって次のように述べておられます。

殊に大陸の沿海の如きは、北は朝鮮の半島から馬來印度の果まで、稀にもこの貝の捕れるといふ例を聴かず、永い年代に亘つてすべて之を遠方の島に求めて居た。単なる暖流の影響といふ以上に、浅い岩瀬でないとし息しなかつた為かと思われる。今でも南海の産といふ言葉を、心軽く使つてゐる人も有るやうだが、古くは嶺南の陸路は通じなかつたのみで無く、海まで降りて行けば、必ず手に入ると、いふものでは決してなかつたのである。

ところが、一九七二年春、韓国済洲島の済州市の海辺で、シプレア・モニタ即ちハナビラダカラ・キイロダカラが容易に採集されることを知りました。シプレア・モニタの他にヤクシマダカラやツノガイなども見ました。海辺の店で売っていました。島の子供たちが採集したものだとして店ではいっていません。この島は黒潮に洗われる島である上に、浅い岩礁があるために海辺で豊産されるのであります。先生が御在世なら、最先に報告申し上げねばならない発見でありました。

中国東南沿岸地方にも豊産地があったのではないのでしょうか。雲南石寨山には銅鼓とともに青銅の貯貝器が発見されています。宝貝を容れる容器です。青銅の貯貝器には四頭の水牛が配されています。貢納を示すと見られる運搬する人群の動的に表現された群像があります。バンドを頭頂部にかけてバスケットを背負った人物も見られます。宝貝はいふ迄もなく、南海々辺から運ばれたものであります。

琉明貿易に際して、宝貝が貢納品として重要な意義をもっていたことを示す資料として宣徳九年（一四三四年）の琉球の貢物目録に海巴五百五十万個という巨大な数字が登場していることに先生は注目されています。これはまことに有力な資料ですが、宝貝の東亜における生産地としては、わが南島のみを特別な産地として、きめてかかることには問題があるうと思われしますので、一言附加えておきます。

以上をもって、本日の私の講演を了えたいと思います。